

牛群検定通信 No135

～ 暑熱期飼養管理の注意点 ～

1 夏場のTMR給与の注意点

梅雨が明けると猛烈な暑さがやってきます。暑さと共に牛の食欲は低下し、乳量が減少したり、発情が来なくなったり、生乳生産に大きな影響が出てきます。暑熱対策として送風やミネラルの十分な給与など細やかな対応が必要ですが、TMRで給与を行っている牛舎では、更に注意が必要です。

夏場のTMRは原材料によっても異なりますが、基本的に調整してから10時間程度した頃から2次発酵による温度の上昇が見られ、調整後15時間を経過すると50℃近くまでなることも珍しくなく、その後の温度も余り低下しない傾向にあります。このような状態では飼槽にエサはあるだけで、只でさえ飼料摂取量が低下する時期に、温度の高いエサでは牛の食は進みません。

ですから、夏場におけるTMRの給与は2次発酵の影響を少なくするため、手間は掛かりますが一日当たり少なくとも2回は行うべきで、一日1回給与で行っている経営では、TMRは2次発酵を起こして温度が上昇し暑熱の影響を更に受けることになります。

2 牛群検定成績表と暑熱

暑熱の影響を受けると飼料の摂取量が低下することにより乳量は当然低下しますが、乳成分も低下します。無脂固形分率やMUNが低下している場合は乳量に対して飼料摂取量が不足していることを示していて、併せて乳蛋白質が低下している場合は摂取蛋白質やエネルギーが低下している事を示しています。乳量とMUNが同時に低下している牛は暑熱の影響を受けているといえ、注意が必要です。

また、暑熱期の乳脂率の低下は粗飼料の不足というよりは、エネルギーの不足により起こります。これは乳成分の組成と関係しており、飼料摂取不足からくるエネルギー不足が原因と考えられています。詳しくは牛群検定通信 133 号や、＜家畜改良事業団ホームページ「牛群検定情報の活用（乳成分編）」＞を参照してください。

検定成績表では検定日気象情報を記載しており、あなたの住所に最も近いアメダスの平均気温、最高気温、最低気温などが分かるようになっています（牛群検定気象情報カウダス）。これらのデータを活用して暑熱対策を行ってください。

3 暑熱と繁殖

暑い時期に発情が来なかったり、種が付きにくいことは仕方ありませんが、暑い時期にもう一つ気を付けなければならないことがあります。それは流産や早産が起こることです。妊娠している牛が流産をして、再度種付けをすることになれば、その損失は計り知れません。

妊娠は黄体によって維持されていますが、飼料摂取量が低下し、エネルギー摂取量が不足すると黄体の機能が低下して、流産や早産が起こりやすくなります。このため、飼料摂取量の低下する夏場は、妊娠している牛には澱粉や糖を多く与え、黄体機能の維持を図らなければなりません。